

# 改訂の序

大腸癌の罹患率は年々増加しており、内視鏡による大腸腫瘍の治療はますますその需要と重要性を増している。大腸腫瘍の内視鏡診療において重要なことは「内視鏡挿入手技・診断学・治療手技の3つ」で、どれ1つ欠けてもきちんとした診療は成立しない。大腸内視鏡がスムーズに挿入できなければ、正確な診断や治療はできないし、内視鏡の挿入手技を習得できても、正しい診断学が身についていなければ正しい治療法の選択はあり得ない。また、治療手技が未熟であれば十分な治療はできない。このような背景のもと2008年に羊土社から『大腸EMR・ESD』という適応や手技をマスターする実践的入門書を発刊させて頂いた。おかげさまで大好評を得て多くの内視鏡医の先生に購読頂いた。

2012年4月に大腸ESDが保険適用になってEMRとともにESDも一般化しつつあり、近年、その棲み分けの重要性が増している。このような状況のなかで、最先端のEMR/ESDをマスターするための新たな入門書として改訂版を発刊することになった。

改訂版では、新しい執筆者を加え、基本となる術前診断学や各種内視鏡治療手技の適応と選択基準、偶発症の問題などについて、コツとピットフォールを包み隠さずわかりやすく、新しい画像(症例)や動画を取り入れ詳述し、術前診断に基づいた正しい治療手技の選択と、その手技の実際がかゆいところに手が届くように解説されている。また、最近改訂あるいは新規発刊されたガイドラインのポイントもしっかり盛り込んだ。本書は、後期研修中の若い先生や後期研修以降の先生が臨床の現場で大腸腫瘍を発見した際、正しい治療法を選択し正しく治療するために即戦力として役立つ実践書である。

本書の特徴は、これまで通りCase Study(Q & A)により実践感覚が身につくよう工夫していることであるが、動画症例が加わってさらにパワーアップした。本書の内容はきわめてわかりやすく、内視鏡治療に携わる先生がくり返し熟読して下されば、必ず明日からの診療のお役に立つものと確信する。この改訂版が、内視鏡診療に日夜研鑽を積まれている若い先生のさらなる力となれば望外の喜びである。

最後に、大変お忙しいなか快く執筆をお引き受け下さった先生に厚く御礼申し上げるとともに、このような機会を与えて下さった羊土社の諸氏に感謝する次第である。

2014年初秋

広島大学大学院医歯薬保健学研究科内視鏡医学  
広島大学病院内視鏡診療科  
田中信治

# 初版の序

大腸癌の罹患率は年々増加しており、内視鏡による大腸腫瘍の治療はますますその需要と重要性を増している。大腸腫瘍の内視鏡診療において重要なのは「内視鏡挿入手技・診断学・治療手技の3つ」であり、どれが1つ欠けてもきちんとした診療は成立しない。大腸内視鏡がスムーズに挿入できなければ、正確な診断や治療ができるはずがないし、内視鏡の挿入手技を習得できても、正しい診断学が身についていなければ正しい治療法の選択はありえないからである。もちろん治療手技が未熟であれば十分な治療はできない。

臨床の現場で大腸腫瘍を発見しても、正しい治療法が選択され正しく治療されなくては完全な内視鏡診療は成り立たない。近年の内視鏡治療手技の進歩は著しく、多くの内視鏡医がEMRやESDなどの治療手技を一生懸命勉強しており、学会のビデオシンポジウムや各地の内視鏡ライブデモンストレーションが盛んである。しかし、もっと身近で日々内視鏡治療手技の習得することに役立つ教材が望まれている。

このような背景のもとで、後期研修中の若い先生、あるいは後期研修以降で勉強しようと意欲のある先生が、最先端の内視鏡治療学を実践的にマスターするために必要な入門書を企画させて頂いた。

本書は内視鏡治療学のテキストであるが、まず、その基本となる術前診断学や各種内視鏡治療手技の適応と選択基準、偶発症の問題などを、EMR/ESDを中心に執筆者の知りうるコツとピットフォールを包み隠さずわかりやすく画像を多く取り入れ解説していただいた。

本書の最大の特徴は、Case Study（問題形式：Q & A）でより実践感覚が身につくよう工夫したことであり、病変の性質や状況に応じた正しい治療手技の選択と、その手技の解説を重要項目やポイント、鑑別診断、参考症例などを盛り込み解説されている。本書の内容はぎわめてわかりやすく、内視鏡治療に携わる先生がくり返し熟読して下されば、必ず明日からの診療のお役に立つものと確信している。本書が内視鏡診療に日夜研鑽を積まれている若い先生方の座右の書となれば望外の喜びである。

なお、大腸腫瘍の診断に関しては、本書の姉妹書として「症例で身につける消化器内視鏡シリーズ 大腸腫瘍診断」が初心者から中級者の方を対象に発行されており、基本から実際の症例検討およびその解説までかゆいところまで手の届いた実戦用参考書なので、これもぜひ購読されたい。

最後に、大変お忙しいなか快く執筆をお引き受け下さった先生方に厚く御礼申し上げますとともに、このような時を得た企画を組む機会を与えて下さった羊土社・鈴木美奈子氏と佐々木幸司氏に感謝する次第である。

2008年初秋

広島大学病院光学医療診療部  
田中信治